

社会福祉法人
日本医療伝道会
Japan Medical Mission
http://www.kinugasa.or.jp/

KINUGASA

Volume.40 Issue.2

～「わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである」マタイによる福音書25章40節～

第419号

地域へ全人医療の輪を拡げよう

「見えてきたこれからの使命」

戦後の荒廃のなか一九四七年衣笠病院は誕生しました。

横須賀を中心とした三浦半島に、キリストの愛による医療奉仕を行うために設立されたのです。建院の精神である聖書のみ言葉を掲げ、高い医療技術と温かい看護を目指して今日まで励んでまいりました。

設立から六十年、社会構造の大きな変革と共に当院も医療だけではなく、介護・福祉・保健の分野にも積極的に取組み、今では七つの施設で、働くスタッフは七百名余となつて、グループを形成しております。

急激なる少子高齢化社会が進むなか、国は財政維持のため、厳しい医療費抑制を行つています。施設より在宅への道がそうした方向づけを何よりも示しています。

衣笠病院グループの運営理念は、「わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである。」です。設立から六十年、

一貫してこの理念を守つてまいりました。それは隣人愛の精神です。具体的には「からだと心と魂が一体である人間（全人）に、キリストの愛をもって仕える医療」すなわち全人医療の実践です。

衣笠病院グループは七つの事業体を有し、確かに大きくなりました。けれど社会や病院グループがどんな状況下にあつても、私達が守り果たすべき使命は「全人医療の実践」です。スタッフ一人ひとりが使命を正しく理解し、チームワークでお互いに補完しあつて、患者様・利用者様のニーズに添えていかねばならないのです。グループのどの施設とも互いに密接な連携がとれ、有効に活用されることを目指しています。そのために本年度よりグループ全体の調整と推進を積極的に取組むべく、法人事務局を強化しました。従来の総務関係、財務関係の他新たに「事業部」と「地域連携部」を新設しました。



常務理事・法人事務局長

古屋修身

事業部は法人の経営・企画全般の統括を担当しますが、具体的には中長期計画やOMKの推進をします。また、大事なグループ運営理念推進とフォローを展開していくこととなります。

地域連携部は従来から衣笠病院グループが取組んで参りました地域医療をより積極的に取組み、どんなニーズにも添えていくことのできる幅広い内容を軸とした、総合的地域医療を展開する重要な役割を担います。

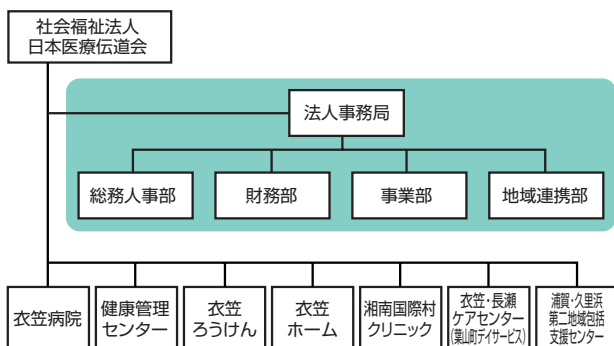
具体的には登録医制度の導入や病診・病病連携の強化です。また、グループの働きを患者様・利用者様を始め、地域や関係機関に積極的に案内する広報活動も担当します。

衣笠病院グループは、愛と技の実践「全人医療」を行つていきます。新約聖書ローマ人への手紙第十二章十五節「喜ぶ者と共に喜び、泣く者と共に泣く」と記している私達の基本姿勢を、ただ単に衣笠病院グループ内だけで行え

ば良いということではなく、全人医療の輪を地域に拡げていくことがとても大事です。そうした面で新たに設置された事業部と地域連携部の働きを、患者様・利用者様・地域医療機関が、当院グループに対しどのようにならぬか評価して下さるのか、設立六十周年の節目を迎えた衣笠病院の真価が問われることとなります。

医療費抑制で厳しさが増していくなかで、衣笠病院はキリストの愛の精神と近代医療により、患者様に高度で良質な医療や看護・介護の提供を全職員が力を合わせて取組んで行きたいと思つています。

衣笠病院グループ



管理職に聞きました。

- ① 新たな役職であなたが衣笠病院グループに貢献したいことは何ですか？
- ② 仕事をする時、大切にしていることは何ですか？
- ③ あなたに影響を与えた言葉は何ですか？（または影響を与えた人は誰ですか？）

衣笠病院



業務課長
小川芳基

- ① 患者様、他セクションより「安心と信頼」を今以上に得る事で貢献したいと思います
- ② 迅速かつ正確に業務を遂行するための環境をいかに構築していくか
課員のモラル向上
- ③ 「患者様は家族と思え」外科
岡村先生（語録）

- ① 技術や知識の向上に努め、それらを現場に活かしていく
人との和
- ② 亡くなった父
- ③ 放射線技術科技師長代行
松村高宏

健康管理センター



事務長
赤澤均

- ① 健康管理センターの成果計算を行い、それに基づいた経営戦略をスタッフ一丸となり、展開できるようにしたい

- ② 他のスタッフへの感謝の気持ちを忘れないこと
- ③ つきなみですが父
十三年も前に他界しているが、生前の仕事に対する姿勢には大変学ぶことが多かった
今になってしみじみ思う…

衣笠ろうけん



事務長
森田兼行

- ① グループ全体への利用者・地域の評判を少しでも良くすること
- ② 前向きに考えること
- ③ 自分がしてもらいたいと思うことを他人にもしなさい（聖書）

衣笠ホーム



事務長
花崎宜司

- ① まだ何もわかりませんが、衣笠病院と衣笠ホームの連携の更なる強化が図れると良いと思っています
- ② 職場の“和”と現場の声を聴くこと
- ③ 両親

衣笠・長瀬ケアセンター



事務長
柳井芳明

- ① 在宅部門の総合相談窓口として、病院・施設など、衣笠病院グループとの連携をより充実できる様なパイプ役の強化を図り、地域の方々がいつまでも安心してお過ごしただけのように「よろず相談窓口」的貢献
利用者（患者）様はもちろん、職員へも謙虚な気持ちと常に感謝の気持ちをもって接する
- ② 人地域笑顔輝き隣人愛人は宝



新たに役職に就かれた

法人事務局



総務人事部長代行
山本英夫

- ① グループ全体の横のつながりを大切にしたいです
- ② とりあえず今は、皆さんの足を引っ張らないこと
- ③ 天の下では、何事にも定まった時期があり、すべての営には時がある（聖書）



総務人事部 人事課長
志水 勝

- ① グループ全体に活気と元気が満ち溢れるように貢献が出来れば嬉しいです
- ② 明るく、笑顔
- ③ 衣笠病院グループを利用される全ての方々を自分の家族と思いなさい



財務部長
阿部 誠

- ① 地域の方々、職員の皆様にとつて、安心できる医療サービス、職場環境の提供
- ② 同じ目的に対しての協力的体制
- ③ 男三十才になったら自分の生きる道を決めなさい（教会の先輩より）
なかなか現在も迷いつづけています



財務部 施設サービス課長
黒崎幸夫

- ① 何が出来たのか未だ見えてきていませんが、スタッフと共に効率的な仕事で診療現場を支えて



事業部長
千葉 一

- ① 全人医療・介護のため限りある身の力を試したい
 - ② ON・OFFの切替
 - ③ 上善如水
- ① いきたいと考えています
 - ② 効率的な業務・運用（めんどくさがりなのです）
人に迷惑をかけない（かけなければ何でもOKってことではないですよ）
 - ③ 器用貧乏でいいから人の役に立ちなさい（子供のころ母より）
なんて親でしょう…でも今考えると鋭い…



地域連携部長
櫻井義弘

- ① 衣笠病院グループ、地域連携部が初めて組織の中に新設された目標でもあります開放病床、登録医制度、逆紹介マップの作成などの新事業を立ち上げ、今まで以上に病病、病診連携を密にしてスムーズな医療体制の構築を図って行きたい
- ② 仕事の優先順位を常に考える
職員とのコミュニケーションを常に図る
- ③ 他界した父
他界した父の厳格なる存在が、さらに自分の中に大きな影響を与えている

60年の恵みに感謝して



第三代理事長 末包敏夫氏



編集委員
阿部 誠

衣笠病院はこの八月で創立六十年を迎えます。最初の二十年は創立から火災、そして復興の時期でした。今回は創立二十年から四十年までを振り返り「衣笠」を導いてきた方々の働きと祈りを覚えていきたいと思えます。

機関紙「衣笠」の発刊

一九六八年十月に機関紙「衣笠」一号が発刊されました。ここに巻頭の言葉として、当時の末包敏夫理事長が書かれた記事を紹介させていただきます。

「衣笠病院が設立されたのは、昭和二十二年八月一日である。初代横須賀米海軍司令官デッカー少将の勧めにより、横須賀市衣笠にある旧日本海軍共済会衣笠病院の施設を譲り受けて、終戦直後の窮乏と渾沌とした社会で、病気に悩む人々に、キリスト教の精神に基く医療奉仕をすることを使命として設立された。日本基督教団、日本キリスト者医科連盟、地域の教会、キリスト者有志、海外のキリスト教会、全国のキリスト者有志の熱心な祈りと協力で支えられて発足した。医療奉仕の業は、その後年々拡張発展して数年後には病床一五〇、年間十万余人にも及ぶ患者を扱うまでになり、社会福祉法人の総合病院として、この地域でなくてはならぬ医療施設になった。国鉄横須賀駅の次の衣笠駅で下車して、徒歩僅か五分という便利なところであり、小高い緑の丘を背にし、樹々に囲まれた四千坪余の閑静な場所で、病めるものの治療には最適な条件に恵まれている。ただ難をいえば施設はみな戦前の木造の建物で修理を要するものであった。しかし殆どの建物が戦禍を蒙っていた当時のこととして、まだまだましの方で、病院の施設として大いに役立った。

灰燼の中から再建復興

こうして病院は拡張発展してきたが、設立以来十三年目昭和三十一年一月六日夜、思いもよらぬ火災のため、瞬時に、病院施設の大半を焼失し、しかも不幸にも十六名の尊い生命を失う惨事があった。すべてを失って、再建復興することなど思いもよらぬことであった。唯々尊い多くの人命を失ったことに対する自責とお詫び、神と人の前に罪の宥しを乞うのみであった。あらん限りの誠意をつくして遺族の方々の慰藉にとめた。不思議にも我々病院側の心が遺族の方々に通じたのか理解と寛容が示され、悲しみは却って病院と患者、地域の人々を深く結びつける結果になった。焼け跡の一隅に残った小さな建物を修理して診療は始められた。僅か五十七床の仮病棟も満床になり、診療を求める患者は毎日押し寄せる有様である。地域の人々のわが病院に寄せる信頼度がいかに深いものであるかを教えられた。医師、看護婦、全従業員は給料の一部を辞退してまでも病院の再建を願ってやまない。地域の人々からも再建の要望が寄せられた。一時は再建復興など不可能事と思っていた理事會も、こうした内外の熱心な要請にこたえて、復興にたちあがる決意を固めた。再建復興委員会を設けて、設計に資金集めに全精力を傾けた。不燃の一五〇床をもつ完備した病院施設は与えられた。しかし病院は施設だけでは足りない。どのような診療がなされているか。日本の医学水準は高いが、診療の制度や態度に於いては未だ未だ欠けるところがあるのではないだろうか。人間を扱い常に尊い生命に関わりをもつ診療者としてのきびしい反省と自覚を深めたい。この「衣笠」の発刊が、わが病院の友協力者を得ることと、これからの針路を追求し、姿勢を正すことに役立つば幸いである。』

昭和37年当時



病院創立60周年その2

本紙をもって四一九号を数え、この三十九年間発行し続けられたのは、多くの先輩方の努力と祈りがなければ達成できなかったことでしょう。今後とも末包理事長の想いを踏まえつつ「衣笠」の発行を続けていきたいと思えます。

当時の理事会は火災のために亡くなられた十六名の方々への償いの働きとして、罹災十年後の一九七〇年に衣笠ホームを開設し、一九七一年に乳幼児センター棟を設置しました。乳幼児センターは発展し現在の健康管理センターへと姿を変えています。また一九七五年には神奈川県補助事業で高齢化社会にむけた老人専用病棟（現東館）が建設されました。しかしながら一九八〇年頃に入ると病院経営状況が非常に困難な時代となりました。再建のために山本敬医師が病院長として迎えられ、また一九八四年には第四代理事長として阿部志郎氏が就任されました。山本病院長は病院の近代化、改革に取り組まれ、一九八七年には新プロジェクト構想のもと現健康管理センターが落成するにいたり、現病院棟の計画に入る時期となりました。

創立四十周年を迎え、「衣笠」二二五号に阿部志郎理事長が「四十年をふまえて将来へ向かう」と題し書かれていますので紹介させていただきます。

(1988年)



第四代理事長 阿部志郎氏 第六代病院長 山本 敬氏

『衣笠病院の四十年の歴史は苦難の連続であった。創設期・火災・復興・新しい施設の開設、財政困難：創立の時から見れば、いうまでもなく四十年後の今日の衣笠病院の姿はめざましい発展を物語っている。開拓者の労苦、歴代院長をはじめとする指導者たちが払った筆舌に尽くしがたい努力を忘れることは出来ない。さらに共に汗を流してきた職員との協力、特に青嶋ミチヨ看護婦の献身は象徴的である。そしてこれを支えてきた地域の方々、地方の方々、福祉・医療関係者、神奈川県、横須賀市、県・市の社会福祉協議会、国

内の教会、米国の教会などの御厚意と御尽力は銘記しておくべきであろう。火災から立ち上がることでできたのは、罪とその赦しの恵にあずからせて下さった神の深い摂理であることを覚えて感謝を捧げずにはいられない。四十周年を一つの契機としてさらに新しい歴史を切り開き、神の恵みと、人々の愛に衣笠病院は応えたいと願う。医療も福祉も大きな転換期に直面している。これから高齢化社会、国際化、情報化社会と大きな変化を遂げながら、二十一世紀を迎えることになる。このような状況の中で、衣笠病院はこれからどうすべきだろうか。四十年の医療・福祉の歴史をふまえて、高齢化社会を基盤に、地域・福祉・医療・保健を結びつける延長線上に、今後の衣笠病院の在り方が明らかにされていると考えられる。具体的ニーズをどのようにとらえ、いかなる態度と方法でこれに対応し、事業を展開していくかが課題となる。幸いに先輩たちが築き、遺し、蓄積して下さった貴重な経験と信用と職員集団があり、地域、教会、

昭和50年当時



行政の温かい支援がある。これらの無形な資産を活用し、社会に対する洞察と、福音への確信に立ち、衣笠病院は、五十周年・六十周年を歩き続けなければならないと思う。』

六十周年を迎えるいま、阿部先生が示された課題を振り返りつつ、日本医療伝道会・衣笠病院グループの将来を考えていきたいと思えます。



長瀬ケアセンター
衣病訪問看護ステーション長瀬
管理者 橋本えみ子

衣笠病院ケアセンター 訪問看護事業

10周年記念

地域の方々のお力添えにより、二〇〇七年十月一日をもって衣病訪問看護ステーションは十年目を迎えることができました。皆様方には心より感謝申し上げます。

一九九七年開設当時の衣病訪問看護ステーションは、スタッフ数六名、利用者数も十名程度で、現在の衣笠病院内の一角で訪問看護事業を開始いたしました。まず訪問看護を始めるにあたって、どのような看護を在宅で展開していけばよいのか、デイスカッションしたことが思い出されます。衣病訪問看護ステーションは順調に利用者様もスタッフ数も増加し、

一九九八年十二月には衣病訪問看護ステーション久里浜が、二〇〇〇年には衣病訪問看護ステーション浦賀が開設しました。また、二〇〇三年十二月には『地域の在宅サビビスの総合拠点』となるべく衣病訪問看護ステーション久里浜・浦賀が統合し、市内で二番目の規模のステーションとして、衣病訪問看護ステーション長瀬がオープンしました。訪問看護事業開始か

らのスタッフは私（橋本）と非常勤スタッフの池田看護師しか残っておりませんが、衣病訪問看護ステーション・長瀬ケアセンターともスタッフ数二十四名となり年間利用者数も二千人を超えております。私たち訪問看護師は、今後も在宅で過ごすご利用者様が安心して過ごすごが出来るように医療的側面からサポートし、常に初心を忘れないうち切磋琢磨していこうと思っております。日々進化する衣笠病院グループの両訪問看護ステーションをこれからもどうぞよろしくお願いいたします。



開設当時のスタッフ

聖句

永遠のいのちのいづば

—ヨハネによる福音書六章六十六〜六十九節—

シモン・ペテロが答えた。
「あなたは永遠の命の言葉を持っておられます。」（六十八節）

日本同盟基督教団 衣笠中央キリスト教会
牧師 齊藤篤美

この場面は、イエス様が神の子、救い主として公生涯を送られた、ほぼ三年間のうちの比較的初期の頃の出来事といえるでしょう。

「メシヤが来られた」との噂が、ユダヤの町から村々に駆け巡ったとき、ユダヤの国と民衆を救うメシヤに会おうとして、おそらく何千人規模の人々が集まり、イエス様の言動に注目します。

ヨハネの福音書六章には、これらの人々とイエス様との会話の内容が記されています。

人々の主な関心事は、現実の苦しみからの「救い」であり、目下の苦悩から開放してくれるメシヤを期待していたのですが、イエス様の語る「救い」は、霊的な、人間の肉面的領域における根源的な事柄でした。

結果は、弟子となった多くの者が失望して、イエス様のもとから離れて行きます。残った十二名の弟子に、イエス様は語りかけます。

「あなたがたも離れ去って良いので

すよ」と。イエス様への信仰は、去る自由を認めています。残った弟子を代表して、ペテロは答えます。

「私たちは、イエス様以外のどこにも救いを見いだすことはできません。イエス様こそ『永遠のいのちのことば』そのものですから、私たちはあなたにのみ従います」。

「イエスとは誰か」、これはキリスト教史二千年の最大のテーマであります。同時に、一人ひとりがこの聖書に触れて学び、受け入れ、告白すべき、人生最大の課題でもあるのです。

今日、言葉は世界に溢れておりますが、魂の奥底に語りかけ、人を救いに向かわせる、いのちに満ちた言葉はほとんど期待できません。

ペテロは、「イエス様にその言葉はある」と、信仰をかけて応答したのです。この、永遠のいのちに溢れるイエス様の言葉を、聖書からご自分のいのちに取り込んでいただければ、とお勧めする次第です。

顔の見える病診連携の会



法人事務局 地域連携部
部長 櫻井義弘

地域医療連携は大病院指向の患者に対する診療所の生き残り策としての病診連携から始まり、さらにそこに在院日数短縮と病床稼働率維持を図りたい病院の経営のための病診連携・病病連携が加わる...というように推移してきた経緯があります。厚生労働省からは、患者様を中心とした急性期から回復期、慢性期、在宅療養へ切れ目のない医療の流れをつくる「ネットワーク型の連携」にシフトする考え方が示されています。衣笠病院も、慢性疾患の外来患者様は地域の開業医の先生方へお願いし、入院が必要な場合は、医院・診療所と共同で患者様の治療にあたり、退院後再び診療所で治療していただくという、機能分化と連携の取り組みを考えてきました。診療所から病院への紹介、病院から地域の診療所への逆紹介がよりスムーズに、また、高度医療機器を用いた特殊検査などを気軽に利用していただき、さらに、開放病床や登録医制度導入についてご意見をいただけたらと考え、二〇〇七年一月十二日（金）、横須賀市医師会衣笠班、豊島班の先生方との「病診連携の会」を開催いたしました。当院医師の紹介、診療科の案内パンフレットを、各科の医師の積極的な協力を得て作成し、新しい病院パンフレットと共に「病診連携の会」に間に合わせ準備いたしました。

当日はお忙しい中十名の先生方にお集まりいただき、本当に感謝申し上げます。先生方からは衣笠病院の医師スタッフの顔が見えない、名前も専門分野もわからない、というご指摘をいただいておりますので、まず衣笠病院の医師スタッフの紹介をさせていただきました。衣笠病院の現状、そして開放病床や登録医制度の話も併せてさせていただきました。ご理解とご協力をお願いいたしました。また、地域連携室から診療所へお伺いし、先生のプロフィールやスタッフの写真撮影などの取材をさせてい

横須賀市医師会衣笠班 小泉先生からの一言



小泉内科
院長
小泉 精策

去る一月十二日衣笠病院講堂において衣笠病院と医師会衣笠班、豊島班との病診連携の会（第二回）が持たれた。以前にも同様の会が持たれたが、衣笠病院の先生方があらかた変わられたのを機に、顔の見える衣笠病院であって欲しいとの願いから必然的にこの会が持たれることになった。

ただき「逆紹介マップ」を作成したこともお願いいたしました。衣笠病院の開放型病床（登録医制度）、逆紹介マップなどの考えを多く診療所の先生方にご賛同いただき、お力添えをいただいで地域総合医療の一翼を担いたいと考えます。今後継続して「病診連携の会」を開催してまいりますので、どうぞ忌憚のないご意見をお聞かせください。よろしくお願いいたします。

当日は、病院長の橋本 勉先生の自己紹介を第一声に、順次自己紹介が行われた。医師会側からは十数名が参加された。自己紹介が終わり別室にて懇親会となり、十分なアルコールと食べ物で、部屋の空気が和み、心地よい雰囲気になり、あちこちで名刺を交換する姿が見られた。

衣笠地区における基幹病院としての衣笠病院をもっと活用し、格調の高い診療を目指していききたい。病院としても我々の希望を受け入れていただき、実り多い病診連携を築き上げていきたいと願っている次第です。第二回この会が持たれることを期待しています。



患者憲章

1. あなたは、国籍、宗教、社会的な地位、病気の種類などにかかわらず、平等に医療を受けることができます。
2. あなたは、どのような時でも人格を尊重され、尊厳をもってその生を全うすることができます。
3. あなたは、理解しやすい言葉や方法で、病気、検査、治療などについて、十分な説明と情報を受け、治療方法などを選択し、これを受けることと、拒否することができます。
4. あなたは、あなたが受けた説明と情報に関し、他の医師の意見（セカンドオピニオン）を聞くことができます。
5. あなたは、医師及び医療機関を選ぶことができ、他の医療機関を希望される場合には、当院において受けた診療に関する情報を求めることができます。
6. あなたは、医師及び医療従事者が知り得たすべての医療上の個人情報について、保護を求める権利があります。
7. 以上の権利を守るために、あなたは、医師及び医療従事者と力を合わせて医療に参加、協力する責任があります。
8. 医師及び医療従事者は、あなたからの要求があっても、「法令」及び「自らの良心や価値観」に反する医療行為については、それを行わない権利があります。

六十年目を迎え衣笠病院グループ職員は、患者様とのお約束として「患者憲章」を常に認識し、からだの治療だけでなく、心や魂の痛みに寄り添う全人医療実践の使命を果たす努力をします。

記事中の写真は全てご本人様の承諾を得て掲載しています。

健康講座	4月 23日(月) 13:30~ 第61回 実践! ストレス解消法 講師 大塚 洋
	5月 21日(月) 13:30~ 第62回 アロマストレッチング 講師 岩崎宏子 *都合により日時などを変更させていただく場合がございます。
糖尿病教室	4月 19日(木) 14:00~16:00 食事療法・栄養指導・薬物療法 他
	5月 17日(木) 14:00~16:00 食事療法・栄養指導・運動療法 他
パイプオルガンミニコンサート	4月 28日(土) 15:00~ 第136回 演奏 木下郁子
	5月 26日(土) 15:00~ 第137回 演奏 千葉 仁

開催のお知らせ
 日程…五月二十四日(木) 二十五日(金)
 場所…衣笠病院総合待合フロアー
 内容…健康チェック・相談コーナー・チャリティーバザー など

■衣笠病院看護フェスティバル
 二〇〇七

衣笠 第419号
 〒238-8588 横須賀市小矢部2-23-1
 社会福祉法人 日本医療伝道会
 理事長 井口 延
 電話 (046)852-6256(法人)
 振替口座 00220-2-13963

春になると海の中に濁りが入り、魚釣りの季節到来である。年齢を経ると共に寒い冬は、釣行が億劫になり、暖かい春が待ち遠しい今日この頃である。

江戸前の釣りといえば、和船での白キス釣りがシーズンを迎える。小型の和船に最大四名の釣り人が乗船し、船頭が櫓を漕いで、釣り人が糸をたれる風景はなんとも言えず、風流なものである。使う道具にもこだわりがある。竹と漆で作った「和竿」を使う。戦前の竿は、すべて竹製だった。現代においても竹の釣応答性、伝導性、対応性は特に優れ、「和竿」を使い出すとその虜になってしまう。使っている白キス竿は、横浜竿の系統の竿師作で全長一三〇センチ、七十グラム、セミ鯨穂先、布袋竹の二本印籠継ぎの本格的なシヤクリ竿である。最高の道具を使い、納得の行く釣果が出ることを信じ、釣りに密かに出かけたかと思っている。

(H・A)

編集後記